

復旧進むも苦闘は続く

益城町 今なお800人避難



「館内は車いすで動くには狭く、景色も見えないので通路で過ごしている」という避難者を気に掛ける秋寄さん(右) (6月30日午後3時、益城町総合体育館で)

死者75人(震災関連死含む)、不明者1人もの被害をもたらした熊本大地震から3カ月。震度1以上の地震は1800回を超え、今も約4700人が避難している。生活インフラの復旧が進む一方で、福祉施設や避難所、支援団体などでは、利用者や住民の安全を守ろうと奔走している。建設が始まった仮設住宅では新たな課題も生じている。苦闘が続く被災地の現状を伝える。(榎戸新、鮫島隆紘)



熊本地震

発災3カ月

今も800人以上が避難している熊本県益城町の総合体育館。指定管理者の公益財団法人熊本YMCA、益城町、支援団体などが連携して避難所運営に奔走している。

発災後、体育館には約1500人が避難した。天井が崩落したため、通路で過ごした人や車中泊した人も多かった。医師や薬剤師など多くの支援団体が駆け付けたが、当初は別々に活動したため全体として機能していなかった。それぞれ違う団体に言われ1日に何回も血圧を測った人もいた。そこで医療ソーシャルワーカーがまとめ役となり、ミーティングの場も持った。気配り、感染防止などの情報を共有したりした。

また避難者の声を拾い上げ、授乳室、幼児部屋、ペット広場なども設置した。熊本YMCAの秋寄光輝・災害対策本部企画部長は「いかに寄り添うか」と話す。

長引く避難所生活で絵かきなどで遊んだり与えられることに慣れず。ミニ図書館も兼ねる。この日、囲碁に参加していた70代の男性は「自宅を片付けているが戻れるめどは立っていない。ここに来るとリフレッシュになる」と言う。

ハウスでは、手芸をやりたいたいという要望があれば支援団体がミシンを借りてくるという真合に、避難者が自発的に活動することをい「一人ひとり状況が変わり、ニーズが多様化する。一方で支援者は少しずつ減っていく。まだ先は見えない」と話している。

よかましきハウスで囲碁を楽しむ避難者 (6月30日午後1時半)



支えながら楽しい成功体験をしてもらい、次の仮設住宅などでコミュニティづくりにかしてほしいという思いがある。また高齢者同士のつながりや避難所内での閉じこもり防止の狙いもある。

避難者の4割は65歳以上で、見守りが必要だ。食事の列につえをつけて並ぶのが大変で食事を抜く人、認知症の症状が出てきた人もいる。そうした人を見つけて寄り添う。支援に入っている社会福祉法人賛育会(東京都)の眞鍋有美子・訪問看護ステーション所長も「耳が聞こえず支援情報が伝わっていない高齢者もいた」と話す。

「福祉新聞」ご購入の申し込みはWEBで www.fukushishimbun.co.jp/ ◆定価年額 1万9440円(送料・消費税込み)